

ぎふグローバル ニュース「Co-Work」 46 号 H28/8/10

8 月 3 日（水）岐阜大学地域減災研究センター内 防災・減災センターの地域減災コーディネーター 村岡治道先生にお越しいただいて 1、2 年生に向けた「HUG 避難所運営ゲーム」の講習会を開催しました。9 月と 10 月に予定している「地域防災を考える会」では、この学校の周辺に住まわれている地域住民の方々や大学生、周辺企業の方々をお招きして一緒に HUG、DIG をしながら地域防災について考える機会をもつ予定です。そのためにまずは生徒たちに DIG と HUG について学んでもらいます。



HUG の概要と HUG をやる意味



大地震や水害など避難を強いられる災害が起こった際に、被災者、避難者がたくさん避難所に集まってきます。しかし、災害時には警察や消防、地方自治体も被災しており迅速な対処は望めません。そのような事態には市民自らが助け合い協力しあって避難所を運営していくことが求められます。そのような状況が起こりうることを想定し、日ごろから地域住民が避難所運営について考える一つのアプローチとして考えられたのが HUG です。

避難所には、年齢や家族構成、被災状況、健康状況などが異なる様々な人が集まってきます。そのような多様な条件の人たちを素早く避難所へ受け入れ、また避難所で起こりうる様々な問題、課題について考えながら運営する必要があります。それをゲームという取り組みやすいツールを用いて高校生や地域住民の方々に知ってもらい、実際の災害時にお互いに協力できる道がないかを探していきます。

HUG 講習スタート

5、6 人ずつのグループに分かれ、実際の鶉地区の避難場所である鶉小学校の見取り図を使って実施。鶉小学校の体育館や運動場、教室の数や広さを踏まえ、どの教室を使うのか、体育館や教室にはどのような人たちをどのように配置するのか、運動場には何を設置するのかを話し合いながらテンポよく避難者をみたてたカードを置いていきます。実際の避難所には多くの避難者が一気に押し寄せ、大混乱することが予想されるので、瞬時の判断が必要になります。カードを読み上げる人、それを配置する人、メモを取る人など役割分担をしてスピーディーに進めます。





トイレや喫煙場所、食事、ペットを連れた人、健康状態の悪化、ストレスなど、避難所での生活が長くなればなるほど色々な問題が発生し、それに対処しなくてははいけません。様々な正解がない問題が巻き起こり、その都度対処しなくてはいけない避難所は小さな町です。だれもが快適に過ごせるようにと考えていても、そうは簡単にはいかないものです。そのようなジレンマに陥りながら、避難所運営の難しさ、ジレンマを知ることがこのゲームの目的でもあります。

本当の防災とは

村岡先生によると、



災害時に避難所へ行ける人は

本当に運が良かった人＝被災しながらもケガもなく、自分で避難所まで来ることが出来た人、もしくは、

避難所に行く必要がない人＝常日頃から家具を壁に留めたり、ガラス飛散防止などの防災対策をしていて被災を免れ、避難所に行かなくても食料などの備蓄を家にちゃんとしてある人

日ごろから自分で出来る防災対策をしておけば、家で被災することもなく、避難所へ行く必要もなく、備蓄の食料で数日は過ごすことが出来る。避難所に行かなくてもすむように日ごろから対策することが「**本当の防災**」なんです。災害時、役所や警察、消防はすぐには来てくれません。自分でできることは自分でしておくことが一番大切です。